令和５年度（2023 年度）卒業証書・学位記・修了証書授与式　学長式辞

長かった冬が終わり、風や光に春の訪れを感じる季節となりました。

この春のよき日に、ご卒業そしてご修了なさいます学生の皆さん、おめでとうございます。本学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げます。

ご家族の皆様、お子様のご卒業を心よりお慶び申し上げます。幼い頃から今日までの様々なことを胸裡に浮かべ、感無量のことと存じます。誠におめでとうございます。

ご来賓の皆様、貴重なお時間を頂き、学生たちの門出をご一緒に見守っていただきますこと、衷心より厚く御礼申し上げます。

さて、振り返りますと皆さんは、コロナ禍での様々な活動制限のなかでの学生生活でした。大学生の皆さんは、全学科そろっての入学式は開催できませんでした。オリエンテーション最終日の４月７日に一回目の緊急事態宣言が発せられ、授業開始の８日のみ対面授業を実施したものの、以後「登校禁止」とせざるを得ませんでした。キャンパスでの授業が受けられなくなり、どんなにがっかりされたかは、想像するに余りあります。皆さんのロッカーに購入後、保管されていた教科書を、アドバイザーの先生方がそれぞれ学生の皆さんと連絡を取り合って、オンライン授業のために宅配便でお送りしたことなどを思い出します。

大学生のみならず、今日ここに無事卒業を迎えられた短期大学生の皆さんも、ご修了された助産学専攻科の皆さんも、特効薬もワクチンもない感染症に振り回され、それまでの「当たり前」の生活ができなくなった時期が長くあったこと、それらの日々がそれぞれに思い出されることと思います。皆さんほんとうによく耐え、頑張られました。

そうしたなかで、開発に 10 年以上要する、これまでの製法とは全く異なる「RNA」ワクチンの開発が 2020 年３月に開始され、同年 11 月にはその有効性が認められ、12 月には一般向けの COVID-19 のワクチン接種が始まり、それが世界中に広がって、世界保健機構が 2020 年３月に表明したパンデミックは、昨年５月にやっと終了しました。

多くの人を救った、「メッセンジャーＲＮＡ」と呼ばれる遺伝物質を使った新型コロナウイルスワクチンの開発に道を開いた功績者の一人、カタリン・カリコ博士は、ノーベル生理学･医学賞を受賞されています。68 歳になる彼女の研究者としての苦節の 40 年については、既に皆様も報道でご存じのことでしょう。私はその受賞時のインタビューの言葉に心を惹かれました。彼女は「私のことをヒーローという人がいますが、それは違います」と言い放ち、「私にとって認められることは、重要ではありません。誰かの助けになっていることが嬉しいのです。」と答えておられるのです。

なぜ彼女の言葉に私が心を惹かれたかと申しますと、世界的偉業をなしたカリコ博士の言

葉「私にとって認められることは、重要ではありません」は、本学の学園歌三番の歌詞「わが身の栄えの　ためにはあらず」に、また、「誰かの助けになっていることが嬉しいのです。」という言葉は、本学の教育の基礎を築かれた「愛と奉仕」の実践者上代淑先生の遺訓「日々のおしえ」の第五日目「人のために尽くすことこそ　私達のよろこびである」と期せずして同じであったからです。

さて、世界においては、実現しない国際平和、地球温暖化を起因とする異常気象、複雑な経済問題、日本においては、歯止めのきかない人口減少、働き手不足、経済格差、繰り返される各地の自然災害、さらに、子どもの貧困や児童虐待など、誰もが不安に感じる事象は枚挙にいとまがありません。

しかし一方で、諸問題を解決しようとする「人間ならではの力」を人間はもっていると信じていますので、私は未来を悲観しません。人間という存在への信頼と希望を、私は持ち続けます。例えば、各地で起こっている自然災害で大きな被害を受けられた方々が多くおられます。誰もが被害を受けられた当初は、茫然自失となるのは当然のことと思います。しかし、そうした中でも人々は、「この子をなんとか育てなければ」とか「再建して従業員のみんなを呼び戻さなければ」といった「生きる意味」を持つ時、絶望のどん底にあってもなんとか「自分の心」を少しずつ取り戻して行くのではないでしょうか。

皆さんもご存じの、『夜と霧』の著者で精神科医であったヴィクトール・E・フランクルは、人間を生かしているのは「意味というものを求める意志」だと述べています。フランクルは自身の著書『死と愛』の中で、哲学者ニーチェの言葉を引用しています。

「〈なぜ生きるのか〉を知っている者は、ほとんど〈如何に生きるのか〉に耐えるのだ」と。

一つ例をあげますと、フランクル自身が、強制収容所の中で辛い毎日を送りながら、「いつかこの戦争が終わって、妻や子に再会し、再び以前と同じように穏やかな家庭生活をするのだ」と自らに苦境を耐え忍んで生きる意味を与えることで、収容所での恐怖の日々に耐えることができたといいます。「生きる理由」がある時には、「如何に生きるか」に耐えることができるのが人間で、それをフランクルは、「人間は意味的存在である」と言っているのです。

もう一つ例をあげましょう。被災地珠洲市の唯一の総合病院の院長は、入院患者を別の病院に受け入れてもらいながら一般外来での診療を再開し、「厳しい環境ですが、何が何でも維持していかなければならないと思っています。地域のみなさんに安心してもらえるよう全力を尽くしていきます。」と語っておられました。つまり、この医師である院長は、「患者さんのために医療を続ける」という「生きる意味・生きる理由」を持つゆえに、人出も物資も不足するなかで、睡眠不足をかこちながら医師としての務めを果たすことができているのだと思います。逆に言えば、「患者さんのため」「地域の皆さんのため」という自分以外の他者

のために生きることが、その結果として、医師として自らが生きること、生かされることになっているといえましょう。

先にお話ししたカリコ博士も、おそらく、ワクチン開発が「感染症に苦しむ人々の役に立つ、誰かの役に立つ」という彼女の「生きる意味・目的」があったからこそ、長いワクチン研究の後に、多くの人を救うワクチン開発ができたのではないでしょうか。

私は、今日ここに集われて卒業される皆さんの人生が、平安であることを心から祈っています。しかし、大小の違いはあるとしても、人生に何らかの苦難は必ずあると思います。苦しいこと悲しいことがあっても、その時にはどうか本日の式辞の一部でも思い出していただき、「生きる意味を求めて」ください。例えば、人のため、地域のため、社会のためにという様に、自分以外の他者のために力を出して生き抜いてください。そうすることが、結果的にはご自分の人生を、与えられた人生を生き抜くことになると私は信じています。

さあ、いよいよ門出です。それぞれに本学で学ばれた専門的知識や技能を活かして、「愛と奉仕」の精神をもって、まだ見ぬ未来に向かって力強く一歩を踏み出してださい。ご卒業ご修了、誠におめでとうございます。

最後に、ご来賓の皆様ならびにご家族の皆様、これまでに賜りました本学へのご理解ご支援に対し、衷心より厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。
この会場にお集まりのすべての皆様と、今日ここに集うことができなかったご家族の皆様のご健康とご活躍、そして、世界の平和を祈り、式辞とさせていただきます。

令和 6（2024）年 3 月 15 日

山陽学園大学・山陽学園短期大学　学長　齊藤育子